



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	荻生徂徠の四書注釋に關する研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	趙, 熠瑋
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12073号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61573
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Zhao_Yiwei_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：趙 熠璋

学位論文題名

荻生徂徠の四書注釋に關する研究

本論文は江戸中期の儒学者、荻生徂徠（1666-1728）を中心とした古学派儒学の思想構図を解明するため、荻生徂徠の著わした『護園随筆』『辨道』『辨名』『學則』『徂徠先生問答書』及び『論語微』『中庸解』『大學解』など、四書注釈に関わる著作を取り上げて、中心資料としてデータベース化した上で、朱熹『四書章句集注』をはじめ伊藤仁斎（1627-1705）の『語孟字義』『中庸發揮』『大學定本』等の四書注釈書と比較研究し、朱子学、仁斎学に対する徂徠の批判について文献的かつ実証的に考察したものである。徂徠の四書注釈に関して、その訓詁学、方法論、理氣論、実践論、認識論、政治論を総合的に考察した基礎的研究である。

第一章「朱子學批判への轉換」では、徂徠が朱子学批判に姿勢を転じるきっかけとなる作品『護園随筆』を研究対象とし、朱子学の重要概念である「理氣」を中心に、『護園随筆』に見える徂徠の見解を取り上げて、朱子、仁斎と対比し、『護園随筆』執筆時の徂徠の思想について考察している。この時期の徂徠は「四書」の注釈書を執筆する時期と異なり、まだ朱子学から完全に離脱できていないと指摘している。徂徠が、伊藤仁斎の古義学に共鳴し、朱子学の理論的形式に拠りながらも仁斎学の世界観を徂徠学に取り込もうとしたため、『護園随筆』では形式的に朱子学理論にこだわりながらも中身は朱子学とまったく異なることを論じていることを明らかにしている。徂徠学は限定的な朱子学支持から仁斎学へと移り、最後に『論語微』において朱子学を批判し、仁斎学の道德論を批判する段階へと変化する変遷過程が見えること、『護園随筆』から『論語微』が完成するまで、徂徠の一連の著作における根幹的な世界観は変わっていないことを確認している。

第二章「方法論としての古文辞學」では、徂徠の核心的な方法論、即ち古文辞学について考察している。先行研究においては、徂徠の古文辞学についての歴史的経緯や影響に関する研究が多かったが、古文辞の具体像についてはあまり解明されていなかった。本章では作成した『論語微』のデータベースに基づいて、「古言」や「古語」の出る頻度、及び引用された文献などを整理し、古文辞学で参考とした対象を究明している。調査の結果、徂徠の言う「古言」「古語」とは、主に「五経」、『論語』及び先秦諸子の著作であり、特に『礼記』、『周礼』、『儀礼』と呼ばれる「三礼」からの引用が多いことを明らかにし、徂徠学の「礼樂」重視の傾向を指摘している。

第三章『論語微』では、徂徠の代表作『論語微』を考察対象としている。徂徠が『論語微』を執筆するまえに、『弁道』『弁名』などの用語集を著し、儒学の諸概念について再定義する作業を通じて、朱子学の理論基盤を打ち崩し、自ら新たに打ち出した概念に置き換えようとしたと指摘している。本章では、まず徂徠がいかに朱子学の権威を低下させたか、徂徠学の中心概念である「先王の道」について考察し、さらに、徂徠の早期作品と比較し、「道」という概念を中心とする徂徠の思想的変遷過程と反朱子学に至る経緯を究明している。

第四章『中庸解』と第五章『大學解』では、先行研究が少ない『中庸解』『大學解』を取り上げて考察の対象とし、徂徠が、内面的精神面の修養工夫を重視する修己から治人へと連続する朱子學の方法は、政治的には実行不可能であると主張したことを明らかにしている。第四章では、『中庸解』について、「誠」という概念を中心に、鄭玄、孔穎達の高注と、朱子の新注とを比較して、徂徠が「誠」概念を「形而下化」する構図を解明している。徂徠が『中庸』首章の「性」、「道」、「教」の概念について、それぞれ、「人の性質」、「先王の道」、「先王の道の教え方」に置き換え、朱子学の重要な修養法である「慎独」について、心理活動ではなく、物理的行動そのものをいつも誠実にすることであると解釈していたことを明らかにしている。朱子学が『中庸』において最も重要な概念であった「誠」について、徂徠は「誠」を「天理」として捉えることなく、単に誠心をもって、忠実に「先王の道」を行うことと解釈している実態を明らかにし、古学尊重の外見と真新しい政治理念の

再構築が徂徠の『中庸』注釈の一大特徴であると指摘している。

また、徂徠の「形而下」的『中庸』解釈の展開を究明するために、徂徠に大きな影響を与えた伊藤仁斎の『中庸發揮』とあわせて比較検証し、徂徠の注釈には、仁斎の注釈の影響と、徂徠自身の「不可知論」の世界観が反映されていることを明らかにしている。さらに、先行研究では、徂徠の学を「気一元論」とすることがよく見られるが、本研究によれば、徂徠のいう気には根源性や規則性がなく、即物的な認識であり、宋明の気一元論と違う特徴が見られると指摘し、徂徠が「気質の性」一元論を主張することで、純粹至善の「本然の性」への復帰を説く朱子の「復初」説を実現不可能な説とし、「中庸の徳」の実現が政治に直結しないと主張したことを明らかにしている。また、徂徠の『中庸解』の「誠」に関する注釈は、単なる朱子学概念への批判ではなく、徂徠の理解した孔子の学が、実は修身の学ではなく、江戸中期の社会の実情に適合するための政治学であったと指摘している。

第五章は、『大学解』を考察の対象としている。徂徠の『大学』注釈は形式上、主に朱子「大学章句集注」を批判する形式で展開されている。徂徠は「大学」を「学宮」という古代の教育機構とみて、「明明徳」の主体を人君に限定している。徂徠によれば、人君は自ら養老の礼を学宮で行い、民に明示することで、民を親しみ愛するというイメージを伝えることができる。人君は孝悌という徳で民を教化し、最終的に「平天下」という理想的状態に辿り着くという。徂徠は朱子学の八条目を批判し、工夫は「格物」の一条しかないと主張する。徂徠のいう「格物」は先王の教が記載された六経を学び、礼楽という「徳」を身につけることである。人君には「知」の能力を有し、先王の徳を身につける人材を見分けて適材適所に登用することが求められるという。徂徠の『大学』注釈は、宋明の性理学には全く触れず、国家統治、更に精確に言えば人材登用を念頭に置いて、朱子学の非実用性を批判していると指摘している。徂徠の『大学解』では、議論の内容も、実行の主体と実現の方法論も朱子学と異なっているが、修己から治国平天下へという大学の構図自体は朱子学と同じであると指摘している。